

「堤婆達多」(中勘助)

佛陀出現の頃の話である。或時、佛陀を生んだ釋迦族の各支族の王子達を集めて劍術の試合が催された。勝者には支族の王姫耶輸陀羅(ヤシヨードハラ)が妻として與へられるのであった。王子の一人堤婆達多(デーバダッタ)は眉目秀麗にして宮女達の寵兒であり、只管「女の渴愛的」となり「女に貪り飽く」事を以て第一の望みとしてゐたが、雄々しい肉體の持主でもあつたから、満々たる自信を以て勝ち進み、決勝戦で、後に佛陀となる王子悉達多(シッドハールド)とまみえた。陰氣臭く瞑想好きで、武藝や風采を念とせぬ悉達多なんぞ齒牙にもかけてゐなかつたが、慢心が隙を作つて不覺を取る。「いはば名もない雑兵に首をかかれたこの屈辱」に彼の胸は煮えくり返る。しかもまんまと女まで浚はれるとは。彼は憤怒と嫉妬と復讐心に燃え、短劍の刃に毒を塗りさへした。だが、己が屈辱をはらす最も相應しい報復手段は幸せな相手から女を奪ひ取り敗北感を味ははせてやる事だと心に決し、親友を裝つて悉達多に

接近し、王姫の心身を我物とする機會を狙ふ。

一方、結婚後、悉達多は以前の憂鬱と思索の生活に戻り、それを傍觀するしかない妻の耶輸陀羅は寂しさを禁じ得ない。子供が出来ても悉達多の態度は變らず、或日、彼は「美しき眞理の果を見出すべく」父母も妻子も地位をも棄てて出奔する。堤婆達多はこれ幸ひと、取り残された女の寂寥と絶望に巧みに付込み、遂にその心を捉へ「身心を貪り弄」ぶ。然るに、やがて女の「誠實」な「美しい心」を知ると、「何人の誠實をも信じない故に己もまた不誠實であつた」彼は驚き、己が行動と動機への「痛烈な悔恨に惱」み、女の愛に誠實に應へようとするに至る。悉達多の名はいつしか二人の間で禁句となる。

七年後、悉達多は大覺を得て佛陀となり、名聲を轟かし、父王に招かれ故郷に戻る。耶輸陀羅は苦悶の裡に自刃する。堤婆達多は「眞實の心を捧げ得」た女への熱い涙を流す一方、最愛の女を奪つたとて悉達多への復讐心を燃やし、復讐の機會を見出さんが爲佛弟子となつて悉達多に接近し、長年の修行に耐へ、三十幾年後、教團の有力な指導者となるが、醜惡な人間性を罵る「憎惡の咆哮」たる彼の激越な説教は實は己が醜惡への罵倒でもあつた。佛陀の「澄明平穩な精神生活」に比べ、「夢寐にも復讐を忘れ」られぬ「生きながらの地獄」の生活に、内心、彼は七轉八倒してゐた。だが、悉達多に「勝利者の日を樂しませはせぬ」と最後迄念じ續

け、剃刀を法衣の下に隠し老いたる病身を悉達多の許に引き摺つて行く途中、息絶えるのである。

中勘助の名作「銀の匙」は、和辻哲郎が評した様に、「子供の體驗した子供の世界」の「不思議なほどあざやか」な表現たり得てゐるのもさる事ながら、そこに描かれる著者の「伯母さん」の無償の愛、「佛心」の類稀なる美しさには誰しも感動を禁じ得まい。然るに、中は「堤婆達多」に於ては我執と肉欲の醜惡な奴隸を描いた。だが、互ひに頗る對蹠的な印象を與へる「島守」と「犬」が「兩者全く同じ精神でかかれたもの」だと彼自ら述べた様に、「銀の匙」と「堤婆達多」も「全く同じ精神」の所産である。理想追求の念が眞摯なものであればある程、己が現實を裁く眼差は假借無きものとなる。「大地の底にかくれて人の眼は逃れても、どうして己が心の眼から逃れることができようか」と、中は堤婆達多の「野獸的なうぶな正直」故の「心の呵責」について記してゐるが、「うぶな正直」こそは中勘助の著しい特色であつて、例へば「夏目先生と私」にもさういふ彼ならではの獨特の漱石像が描かれてゐる。

〔「堤婆達多」、岩波文庫〕